氏名：吉田　千鶴
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲　第 39 号
学位授与年月日：平成 31 年　3 月 25 日
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目：介護施設で働く中年看護師が他者理解を通して自己を変化させていくプロセス（The Process in which middle-aged nurses working for nursing homes have changed their sense of value and their views of life through their understanding of others）
論文審査委員：主査　教授　吉武久美子
副査　教授　田中美恵子
教授　清水　洋子

論文内容の要旨

Ⅰ．はじめに

国民の健康を支える医療が病院完結型から地域包括ケアへと移行することによって、病院の病床構造は大幅に変化してきている。地域包括ケアへの移行に伴って、看護師もまた、病院だけなく病院外での就労の機会を得ることが増えると予測される。

介護分野で就業する看護師は、40 代以降の者が多い（日本看護協会、2018）。そのため、この年代の看護師の多くは、結婚や子育て、親の介護などさまざまなライフイベントを経験している。人生のなかで、40 代は、平均寿命の年齢からすると人生の正午にあたる時期である。そのため、40 代は、人生の後半をどのように生きるのかを創造すると同時に、加齢に伴う様々な変化を実感することで、自身の活動や価値観を変化させやすい。看護領域において、この時期の看護師は、中高年看護師と呼ばれるが、看護という仕事を自己実現させるための重要な手段を得やすいとの報告がある（山崎ら、2012）。そこで、看護師の自己実現を促進する要素として、看護師自身の価値観や人生が変わったと自覚することが影響していると考えた。

看護師の変化に関する先行研究では、臨床経験年数、実践能力段階による看護実践の変化については報告されているが、看護師の価値観や人生の変化に着目した報告は見当たらない。介護施設で働く中年看護師が入所者、看護師、他職種などの他者との関わりを通して、自身にとって、介護施設という就労の場が生活の場へと変化するプロセスにおいて、40 代にみられる特有な経験を有しているのではないかと考えて、本研究に着手した。

本研究の目的は、介護施設で働く中年看護師が他者理解を通して、自己を変化させていくプロセスを明らかにすることである。

Ⅱ．方法

１．研究デザイン：半構造化面接法を用いた質的帰納的研究デザインを用いた。

２．研究参加者：介護老人福祉施設、介護老人保健施設、有料老人ホームに勤務する看護師13名であった。

３．調査内容･期間:インタビューガイドを用いて半構成的インタビューを行い、主に「老いゆく人と関わるときに気にしていること、大切にしていること、老いゆく人との関わる中での気づきがその次の関わりやケアに及ぼす影響、介護施設で働いた経験が自身の仕事や人生に影響していること」などについて語ってもらった。インタビューの平均時間は、平均71分（範囲：40-109分）であった。調査期間は、2016年7月～2017年8月であり、インタビュー内容を録音し、逐語録を作成した。

４．分析方法：修正版グランデッド・セオリーアプローチを用いて以下の手順で分析した。

１)インタビュー時に録音したデータの逐語録を作成し､その逐語録を精読し、文脈の背後にある意味を失わないようにした。

２）データと文脈の関係性が失われないようにしながら、意味のまとまりをつかみ、語られた内容に動きや変化があったところを一つヴァリエーションにした。

３）分析焦点者を「介護施設で働く中年看護師」と決定した。

４）２）の作業を繰り返し、仮の分析テーマを決定した。

５）３名のデータ収集の終了時に、具体的な事例を挙げて印象に残る言葉や事例を、分析ワークシートを作成して、概念名、定義、具体例（ヴァリエーション）理論的メモを記載した。

６）複数の分析ワークシートが完成したら、個々の概念のヴァリエーションを見直した。データをみてもあまり具体例が出てこなければ、その概念は検討違いではないかと判断することも検討した。他方、多くのデータがある場合には、その概念を分けて新たな概念を生成することを検討した。さらに、データを見直した際、具体例がでてこない場合は、概念の再検討を行った。

７）６）の作業を繰り返した結果、新たな概念が生成されなくなったとき、また、理論的メモに残した疑問やアイデアについて確認すべき問題がなくなったときをもって、理論的飽和と判断した。

８）概念間の関係を確認し、カテゴリーを生成した。概念とカテゴリーを用いて完結に文章にまとめたストーリーラインを作成した。さらに、概念、サブカテゴリ―の関係性を結果図に示した。

５．倫理的配慮：東京女子医科大学倫理委員会の承認を得た（番号：3961-R）。

Ⅲ．結果

研究参加者は、介護施設で勤務する看護師 13 名であり、年齢は 40～49 歳、介護施設の経験年数は８～20 年（平均 12.7 年）であった。全員女性であった。

介護施設で働く中年看護師が他者理解を通して自己を変化させてゆくプロセ

スは、24 個の概念と 6 個のカテゴリーで生成された。以下に＜ ＞を概念、【 】をカテゴリーで示した結果を記述する。

病院勤務を経て介護施設に転職した看護師は、入所者の一人一人を明確に認識することができず、＜個ではなく風景として捉える＞関わりから始まっていた。看護師は、次第に入所者に関わる機会が増えると、高齢者は身体機能や認知機能が低下しても人間であることに変わりないことや＜「高齢者ではできない」と思っていた自分を発見する＞。この段階で、看護師は基礎教育で学んだ【他者理解の原点回帰】が起こり、このカテゴリーを土台にしてプロセスが積みあがっていく。

看護師の高齢者に対する認識が「高齢者はできない」から「高齢者はできることがある」に変化することで、入所者が＜できることを探す＞ことからケアが展開していく。この“できること”は入所者の“できること”であると同時に、家族や介護職、施設の“できること”でもある。そのため、誰にとって“できること”なのか、主語が変化することで＜ケアの主役が変わる＞。看護師はケアの主役を入所者に戻そうと、【ケアにおけるインフルエンサーとなる】が、看護師自身が発信したことに対して、家族や介護職など＜他者の思いや感情が向かってくることで自分自身が揺れる＞。

一方、看護師自身の変化は、看護施設で働き始めた頃は、同じ施設で共に働いている介護職から、部外者のように扱われていると感じていた。しかし、＜ホームとアウェイという隔たりを作り出していた自分を打開する＞ことで、介護職から信頼されるようになる。さらに、入所者や自分自身の家族とのかかわりの中で、看護師も加齢し、身体的な変化を経験することで、入所者の＜老いの痛みや辛さを自分のこととして知覚する＞。介護施設で入所者や自身の家族など、老いゆく人の変化と自分自身の変化を対比させながら、【自分自身と対峙する】ようになっていく。

介護施設で働く看護師は、ケアの場面においては【ケアにおけるインフルエンサーとなる】こと、【自分自身と対峙する】ことで、自身の【看護の価値観が進化する】。さらに、自身の【看護の価値観が進化する】と施設内での活動だけにはとどまらず、【社会に向かって看護師の存在をアピールする】。しかし、介護施設で働く看護師全てが、社会に向かって看護師の存在をアピールできるわけではない。

介護施設で働く＜看護師の存在をみえる化＞することを通して、介護施設の看護師の役割を見出していく。その反面、介護施設では医療的な知識が十分に得られないことから、介護施設で働き続けるか、病院で働くかを悩み＜40 代って宙ぶらりん＞だと感じている。しかし、看護師は、入所者とのかかわりから自分自身の課題を見つけ、自身の最期の過ごし方を考えるようになり＜私の人生観が変わる＞。また、看護師は、入所者の人生と自身の人生を共に介護施設で過ごすことにより、入所者が＜私の人生を豊かにしてくれる＞存在になる。このような経験が積み重なっていくことで、一人の人間としての看護師である【私の人生が変わっていく】。

Ⅳ．考察

本研究の研究参加者は、病院勤務の頃や介護施設で働き始めた頃は、身体を優先した対象への見方であったのが、入所者とのかかわりが深まることで、他者理解の原点回帰がおこっていた。他者理解の原点回帰を契機に、ケアの内容や看護師のもつ価値観や人生に対する考え方、見方が変化していくというプロセスをたどっていた。そのような変化をもたらした背景には、介護施設が医療提供の場というより、入所者とともに生活する“生活の場”で、ケアする人とケアされる人という関係ではなく、同じ“生活者”として関わることで、看護師が自分自身との向きあい方が変化したからと推察できる。看護師は、介護施設で看護師自身の人生が変わっていく経験をとおして、自身のキャリアとして、このまま介護施設にいるのか、病院にもどるのかという選択を考える一方で、入所者とのかかわりから介護施設での存在意義を見出そうとしていた。これは、三輪（2008）が指摘するミドル期の学習ニーズ、すなわち、長い人生経験から生まれて、社会的に形成された価値観を再検討する学びから、社会的視野を拡大していくという特徴が、40代看護師にも同様に、自身の価値観や人生がかわったことで、高齢者ケアに対応できる人材になることを目指すために新たに学習したいというニーズが生まれていたと考えられる。また、そのようなニーズにこたえることが、介護施設で働く看護師の存在意義につながっていったと推察される。

このような介護施設で働く看護師が、生活者として入所者とかかわることで既存の価値観とは異なる高齢者に対する視点、すなわち生活の中から見える気づきは、病院、在宅でも応用可能である。それと同時に、看護師が生活の中での気づきが促されるような教育体制の整備が看護師の成長発達の一助につながることが示唆された。

今後の課題は、介護保険における施設サービスの種類が多様になってきていることから、各施設の設置目的や機能に応じた施設の種類ごとによる分析を行っていくことである。さらに、本研究の参加者は 40 代の看護師であった。中年または中高年を参加者とした先行研究では、研究の大半が 40 代から 60 代までを含んでいた。40 代から 60 代は、生活背景や取り巻く社会情勢が大きく異なることから、中高年というくくりではなく、年代ごとや新たな考案した集団などを用いて研究が行われることが求められる。

論文審査結果の要旨

平成 31 年 2 月 13 日、吉武久美子（主査　教授）、田中美恵子教授、清水洋子教授の 3 名からなる審査委員会が開かれ、学位論文に関する審査が行われた。下記に審査の概要を記述する。

本研究は、介護施設で働く中年看護師が実践において入所者という他者の理解を通じて、自己をどのような変化をさせていくのか、質的研究手法によって明らかにすることを意図した研究である。地域包括ケアが推進されるという背景のもと、今後、介護施設で働く看護師が増加していく可能性が高いことを考慮すると、

病院とは異なる介護施設で働く看護師の他者理解による心理的な変化を具体的に提示した点は、時代的な意義のある研究である。本研究は、大学院博士前期課程のときから、一貫して、病院とは異なる介護施設で働く看護師の経験に焦点をあてた研究が土台となって、本論文に至っている。

本研究では、介護施設で働く看護師の自己を変化させていくというプロセスを修正版グランデット・セオリーアプローチによって、適切な分析手続きにもとづいて、抽出できていると思われる。テーマに対する分析方法の選定も適切であり、理論的飽和にまで至った結果となっている。

しかし、論文の構成上、主題の不明瞭さという点が見受けられた。すなわち、介護施設で働く看護師に焦点をあてているのか、中年看護師というキャリア発達について主題を置きたいのか、どちらであるのかが明確ではなかった。そのため、文献検討や考察の深まりの不十分さがみられた。

文献検討では、１）自己を変化させていくプロセスの経験、２）高齢者を理解するための老いについて、３）中高年という年代の特徴について、４）介護施設の生活の場と表現されるときの生活について、５）介護保険の居宅介護支援事業所における看護師の就労状況について言及されている。介護施設で働く看護師の特徴を把握するという点では包括的にはできているが、実証的な研究のレビューが不足していた。また、各検討テーマの関連性の記述、文献検討から本研究につながる背景や根拠についての説明の記述が不足していたとの意見も出された。

結果は、「介護施設で働く中年看護師が他者理解を通して自己を変化させていくプロセス」を概念とカテゴリー、および、両者の関係をストーリーラインと結果図によって示されていた。各カテゴリーと概念の説明については、根拠となるローデータをも用いながら詳細に記述されていた。しかし、ストーリーラインには、「自己が変化してゆく内容のプロセス」の「変化してゆく内容」についての記述はみられていたが、「プロセス」について説明が不十分であるという意見があった。とくに、結果図に記述されている文字の不明瞭さと図の説明の不十分さについても指摘が及んだ。また、「看護の価値観の進化」というカテゴリー名については、カテゴリー名とその内容についての再検討を要するという意見があった。ただし、表現やカテゴリー名の不十分さはあるものの、妥当性があると確認できる内容であった。

考察では、他者理解の原点回帰から始まる看護師の変化の特徴、生活の場の看護が変化をもたらすもの、人生が変わっていくことがなぜ生じたのか、社会に向かってアピールする看護師となるような介護施設にいる看護師の存在意義について言及されている。本内容は、結果から導きだされたものであり、大きな飛躍となる内容も見受けられなかった。

しかし、考察の深まりという点については、前述したとおり、主題の不明瞭さからくる点にくわえて、看護師の自己を変化させていくプロセスの妥当性や一般化の可能性、看護職の発展に本研究の知見が具体的にどれだけ寄与するのかについての言及が不十分であったとの意見が出された。前述した結果における不十分な点と考察の理論的、実践的観点からの先行研究を用いたプロセスの妥当性の検

討という点等については、今後さらに精錬させていく必要があるであろう。

本研究の成果の一つは、介護施設で働く看護師が入所者という他者の理解を通して、自己をどのように変化させていったのかというプロセスを詳細に記述できたという点にある。まだ、介護施設で働く看護師が病院で働く看護師と比べると少なく、介護施設で働く看護師の経験が十分に明らかにされていない現況である。とくに、介護施設で働く看護師は、一見、病院で働けなくなった人が働いている人たちというネガティブなイメージに捉えられやすい。そのような状況で、本研究は、今まで光が当たっていなかった介護施設で働く看護師に焦点をあてて、自分の価値観や人生観を変化させながら、看護師が介護施設にいる意義を新たに見出しているという現象を浮き彫りにできた。

もう一つの成果は、病院とは異なる介護施設の入所者とのかかわりを通して得られた気づきを明らかにしたことである。介護施設で働く看護師は、ケア提供者でありながら、入所者に対してケアをする人とそれを受ける人という関係にとどまっていなかった。看護師は、入所者と同じ生活者として関わることで、病院勤務時代には経験しえなかった新たな気づきを得て、その気づきは看護師自身の価値観や人生観の変化にまで及んでいだ。看護師がケア提供者であると同時に、対象者の生活者としてかかわることで初めてみえてくる気づきで、かつ価値観まで揺るがされるほどのものであることを明らかにできたことは、新たな知見である。

本研究によって得られた看護師がケア提供者でありながら、入所者と同じ生活者としてかかわることで見えてくる気づきは、新しい看護師と対象者との関係性から生まれるものと示唆される。看護者がケア提供者でありながら生活者としてのかかわりをもつという関係性の構築は、介護施設の入所者との間だけなく、在宅医療などの他領域においても応用可能であろう。まさに地域包括ケアが推進される現代において、本研究は、看護者が多様な対象者とのかかわり方を考える上で貴重な論文となる。さらに、今後、生活者として対象者との生活の中から見えてくる看護者の気づきを促すことは、看護基礎教育、継続教育の分野に応用できる可能性を秘めている。

本研究は、介護施設で働く看護師の心理面の変化を詳細に明らかにし、また、ケア提供者でありながら生活者として入所者に関わる看護師と対象者との新しい関係性の示唆を得られたことから、本領域において、先駆的で基礎的な研究として意義深い。したがって、本研究は、看護学の分野に重要な知見をもたらす学位論文にふさわしい研究論文であると言える。

以上により本論文は、学位規則第 4 条第 1 項に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査並びに最終試験に合格と判定する。